

佳作

## ゼロから九・二へ

茨城県 日立市立日高小学校四年 渡辺 友里

「今のうちだよ。」

お母さんは、起きてダラダラしている私に言った。今日の最高気温は三十四度と言っていたけれど、お父さんと自転車でダムへ行こうとしていた。朝ならまだすずしくて気持ちよいと思った。

ぐん手。ヘルメット。めがね。マスクをポケットの中に入れてじゅんび完りよう。スタンドを大きくけり上げた。サドルはもうあつかった。お父さんは先に行つて六こぎ目ぐらいからスピードを上げていった。

ゆるやかな坂をぬけると川に小さな橋がかかっていた。川の中には茶色く見える小さな魚の大くんが泳いでいた。セミの鳴き声と水の流れる音を聞いて、「夏だなあ」と思った。

次は、少しゆるやかな長い上り坂と下り坂だった。

上り坂でがんばってペダルをこいでいると、スピードがおそくなつて自転車から落ちそうになるので、中からは自転車をおして上った。周りには木が植えてあつて、下にじめじめした土があつた。ほそうされた歩道がせまくて、向こうから来た人が道をゆづってくれた。下り坂はブレーキの使い方がむずかかったが、上り坂より楽だった。

その後、急な坂が三回続いた。上り坂は自転車をおして上った。お父さんが先に行つてしまったので追いつくために走つたが追いつかなかつた。いつもの五倍ぐらい足が重かつた。上まで行くとお父さんが水とうを持って待っていた。休けいの時は水とうの水を三分の一ぐらい一気に飲んだ。えん分チャージも食べた。せ中にあせをかいて、Tシャツにくっついた。

日かげのある上り坂で、暑かつたのでぐん手を外すと、ひんやりすずかつた。少し進むとダムが見えてきて「やっと着いた」と思った。

ダムでは、また休けいをした。空は青くて、水面が光っていた。ふん水は五分前に終わっていたが思つていたより早く着いた。すぐに帰るじゅんびになつた。水とうの中にたくさん水を入れた。

どんどん気温が高くなつてきて、行きで見かけなかつたバッタやちようもたくさんいた。日かげのある下り坂はせん風きの風みたいになり気持ちよかつた。最後の上り坂は行きの時よりも、ストーブみたいになり暑かつた。「つかれた」と思いながら、ペダルをこいでいると家が見えてきて、ほっとした。

去年の今ごろは一センチも自転車に乗れなかつたけど、今回はいつも車で行つていたおうふく九・二キロのダムへ自転車で行けるようになった。自転車で行くと、道をゆづってくれた人のやさしさ、日かげが気持ちよかつたこと、水のおいしさに感動した。つかれたけど楽しかつた。これからは、他のこともこのようにがんばっていききたいと思った。